



# 1分間に起こす文字数 { 300字超 }

大和速記情報センター 速記部主任

藤田 貴子さん(43)

イヤホンから会議の録音が流れると、キーボードに置いた指をリズムカルに動かしてはじめた。パソコン画面から視線を落とすことなく、一字一句起こす。電話の着信音が鳴らないよう設定されている静かなオフィスに、「カシャカシャカシャ カシャカシャカシャ」とキーをたたき音が響く。

「納品までの早さ」を売りにする創業62年の業界の老舗には、会議や座談会、会見など様々な文字起こしの注文が舞いこむ。1分1秒を争う作業の極意はキーボードから手を離さないことだ。ペダルを踏むと音声を聞き直せる独自の装置を駆使し、ひたすらキーをたたき。1分間に起こす文字数は社員平均より2割ほど多い300字超。集中すると2時間の会議の音声を4時間ほど起こす。業界では「3倍の時間で起こせたら一人前」(同社)で、普通は6時間以上かかるところだ。手がける議事録は年約500本にのぼる。

はじめは速記に魅せられた。大学時代。古代ローマから続く歴史ある仕事らしいと聞き、興味を持った。紙と鉛筆を手で速記の符号から文字を起こす職人集団。そんなイメージに憧れた。「議事録などは長い間残っていく重要なもの。それをつくる仕事に携わることに魅力を感じた」。教室に通い、1級速記士の資格を取得した。

入社して目を疑った。時代が変わり、速記者はワープロに向かっていった。触ったことのない機械。5分の録音を起こすのに30分かかった。納品済みの音源をひっぱりだし、文字を起こしてキーの位置を体にしみこませた。

手足駆使 笑いや間、臨場感も表現

録音から任されることも多い。新人時代に臨んだある会議では、肉声でやりとりするはずなのにマイクが登場。予想外の展開に音量を調整しきれず、あとで再生すると音が割れていた。文字起こしを任せたベテランは聞き取りに苦しみ、音を聞いた校閲担当者からも「ひどいね」と酷評された。どんな事態でも気持ちを早く切り替えることが大事だと痛感した。

実際、思いがけないことはよく起きる。発言者のマイクが入っていなかったり、同時に複数人が発声したり。パニックになりそうな気持ちを抑え、録音できていない場合に備えて速記の符号を紙に書きつける。最近は起こし終わった原稿に修正の指示が入ることも減った。「全社にいる約60人の速記者の中でも仕事の堅実さは際立っている」(津田健司社長)と信頼は厚い。

知らない言葉は必ず辞書などで調べる。友人と世間話をしていても、漢字がわからない単語が出てくると、どんな字を書くのか相手に聞いてしまう。ラジオの音声や電車の社内放送を頭の中でタイピングしたり速記符号に置きかえたりするのがクセになった。

17年間で会議の雰囲気も変わったと感じる。「相手の言葉を遮って自分の発言を重ねる人が増えた」。主張できる人なんだと納得する半面、相手の話を聞いているのか気になる。

そんな臨場感を伝えるため、ヤジや笑い声、語尾をのんだ時の間まで文字や記号に起こすよう心がける。「声にならない声まで表現したい」。ひそかな野望を抱いている。(末崎毅)



手でキーボードを操作しつつ、足でペダルを踏んでパソコンから聞こえる録音を戻す。作業中の姿は、鍵盤に向かうピアノリストのようだ。東京・新橋、家老芳美撮影

凌腕のひみつ  
スゴウデ

親指キーでかな入力

文字入力で愛用するのが「親指シフト」のキーボード。中央下の親指キーを使うと手を大きく動かさずかな入力が可能だ。キーを打つ回数もローマ字入力より減り、入力速度が増す。



ニュースはラジオで

会議や会見では時事問題についての発言があることも多い。文字を起こす時に話についていけるよう、普段からニュースに接することを心がけている。活用するのはラジオだ。「その日のニュースが非常にコンパクトにまとめられている」といい、自宅出勤前の支度をしているあいだや、電車での通勤中に聞き流している。

プロフィール

ふじた・たかこ 横浜市出身。中央大卒。1999年6月に日本速記協会が認定する1級速記士を取得し、大和速記情報センターに入社。速記部に配属され、14年から6人を束ねる主任を務める。